

〔一四〕 氏が此の如く碑文と唐書との兩者に見ゆる可汗の名を對照し、碑の最後に見ゆる可汗即骨咄祿懷信可汗の時に此の碑が建てられたるものなりと見たるは、研究の方法を得たるが如くに見ゆれど、然も此の對照比定の間には誤謬の存するもの頗る多し、假令ば碑の XI 1-17 が磨延賸のことを記し、同行 27 以下が牟羽可汗のことを記したるものなりと曰へど、此の XI の文は共にかゝる所にて讀み切らるべきものに非ず、又碑の初の三行を國祖裴羅につきて記したるものなりと曰へど、此の三行間には III に「山河中建都」と記さるゝ人、IV に「襲國於北方之隅、建都於噶崑之野」と記さるゝ人あり、而して此の人の子が位を嗣ぐと見え (IV 24-31)、V には「至高祖・闕毗伽可汗」(56-64) と記さるれば、此の間に少くとも、三、四人の君長を記したるものにして、決して裴羅一人のことを記せるに非るが如き之なり。

〔一五〕 新唐書回鶻傳に「頡咄登里骨啜密施合俱錄英義建功毗伽可汗」と記せるは多くの誤を有するものなり。

〔一六〕 新唐書回鶻傳には愛登里邏汨沒蜜施俱錄毗伽忠貞可汗と記せり、即ち初の「愛」と邏字下の「汨」を多しとす。

〔一七〕 骨咄祿と汨咄祿とが同音を寫せるものなることは明なり。

〔一八〕 北方諸部が唐の天子を天可汗と稱せしことは新唐書本紀貞觀四年の條に「四月戊戌西北君長請上號爲天可汗」と見え、舊唐書本紀同年の條にも「自是西北諸蕃咸請上尊號、爲天可汗」と見え、又二十年九月、鐵勒諸部が「咸請至尊爲可汗」(新唐書本紀)と曰ひ、「九月甲辰鐵勒諸部請上號爲可汗」と見ゆ(舊唐書本紀)、通鑑には此の二十年の請につきて「願得天至尊爲奴等天可汗、子子孫孫、常爲天至尊奴」と記せり、天可汗はトルコ語の Tängri Kayan の音譯なり、此の如く唐の天子を天可汗と稱する例はあれど、此の場合に於ては自ら別義なり、Chavannes, Pelliot 兩氏に従へば、敦煌千佛洞に於る漢文の題銘中にも天可汗の語ありて、甘州の回鶻可汗が此の稱を用ゐたるを知り得べしと曰ひ (Un traité manichéen, p. 203. note 2.) 碑の天可汗も回鶻の現に治世せる君主を稱したるものなりと曰へり。

〔一九〕 本篇二二七頁及び二二八頁參看。